
記憶の印

彪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶の印

【著者名】

彪

【Zマーク】

N6411C

【あらすじ】

国に入った暗殺集団。その目的は、王子の殺害。日常に退屈を感じていた王子は、事件をきっかけに外の世界へと足を踏み出す。強過ぎる王子と国一の魔術師の、よく分からぬ冒険談。

カタン

棚の上段から一冊の本が抜き出される。

その小さな両手には大き過ぎる大きさで、彼は僅かによろめいた。

【空の童話集】

静かな部屋の真ん中で、少年は本を床に置きページを捲る。

彼がその手を止めた時、そこにはこんな物語が記されていた。

3 · 『とある魔術師の話』

まだ、魔術があまり知られていなかつた頃のお話です。
昔々あるところに、小さな村がありました。

古くからあり、深い深い森の中にある村です。

そんな村で、ある日、一人の男の子が生まれました。
名前を、ロウ・ロットといいます。

ロウは、村の商人の小屋で生まれました。

この村で子供が生まれることはとても珍しいので、村人達は皆喜びました。

ロウには、生まれつき魔術の才能がありました。

家に残っている古文書を見ては、呪文を唱え練習します。

唱えた呪文は大抵一回で成功したので、彼は呪文とその効果を覚えるだけで殆どの魔術を使うことができました。

ところが、彼の村では魔術は邪悪なものとされていました。

彼はやがて、村人達に迫害を受けるようになりました。

両親さえも、気味悪がつて近寄りません。

殴られ、蹴られ、火の点いた松明を押し当てられました。

しかし、彼は決して人に対し魔術を使いませんでした。

彼の姉のお陰です。

彼女は迫害する村人達を追い払い、一人で彼の味方をしました。

ロウにとつて、姉だけが唯一信じられる存在でした。

けれど村人は、そんな彼女を放つてはおきませんでした。

彼等の親を殺し、姉を他の村に売り飛ばしてしまいました。

ロウはこれにとても怒りました。

自分が何をしているのか分からぬほどに怒りました。

そして強力な呪文を唱え、村を焼き払いました。

逃げ惑う人々が、宙に浮くロウを見上げて泣いています。

ロウは、そんな人々を一斬すると、更に呪文を唱えました。

村は、あつという間に灰になってしまいました。

古文書は無くなってしましましたが、その全ての内容は、彼の頭の中にはありました。

彼は人間達を憎むようになり、次々と街や村を焼失させて回るようになりました。

人々は彼を、「怒りの魔術師」と呼ぶようになります。

やがてやつてきた街で、ロウは呪文を唱えようとしていた口を閉じました。

その正気を失った瞳に映つたのは、姉の姿でした。

遠くからでしたが、はつきりと映つたのです。

ロウは急いで追いかけました。

姉は、げつそりと瘦せ細つていました。

ボロボロの布の服を着せられ、伸び放題の髪は乱れています。

彼女はロウの姿を見つけると、抱き付きました。

彼は何も言わず、姉を抱き返します。

そのとき、一人は鋭い痛みを感じました。

二人の胸を、一つの剣が貫いています。

「怒りの魔術師」を追っている、剣士でした。

心臓を貫かれた二人は、お互を見つめ合いました。

そして、ふと笑います。

ロウは治そうと思えばどんな怪我も治せる自信がありましたが、

何もしませんでした。

二人の魂は、ゆっくりと昇っていきます。

そしていつしか光となつて、世界に降り注ぎました。

1・崩れゆく日常

それは綺麗な部屋だった。

天井のシャンデリアは明るく部屋を朱色に照らし、部屋全体に豪奢な雰囲気を漂わせている。床は深紅の絨毯で覆われ、その上の大きく立派な家具には埃一つ乗っていない。

とても子供部屋とは思えないほど広いその部屋には、しかし肝心なものが欠けていた。

部屋の主人が、いないのである。

不意に、とんとんと扉を叩く音がした。

失礼します、と部屋に入つたのはまだ若い女性。

女は部屋を見渡し、溜息を吐く。

「また脱走ですか……」

部屋主不在の小奇麗な部屋を呆然と眺め、ルツセル国の王子の教育係フレア・スター・ジユは呟いた。

「こんにちはおじさん！」

元気な少年の声が響いたのは、街外れの菓子屋。

「クラウス王子様！？」

悲鳴に近い声を上げたのは店主。慌てた様子で、クラウスと呼ばれた少年に駆け寄つた。

「何か御用でしょうか？もしや先日お出しした菓子に何か悪いものでも

「

入つてなかつたから大丈夫だよ。美味しかつたし。それ

にもしお腹壊しても、勝手に食べた僕が悪いんだから

クラウスは手を振つて否定する。そして、店内に並ぶ菓子をひらりと見やつた。

「良かつたら、 そこのケーキもらえるかな？」

「しかしこんなものを食べてもし

「…………大丈夫だつて。そういうのキコウつて言つんだっけ?と

にかく僕が責任持つからいいよ」

「はい…………」

心配げな表情で店の奥に向かう店主は、やがて真っ白なケーキを乗せた皿を手に戻ってきた。

クラウスはそれを受け取り、椅子に腰掛ける。

と、次の瞬間声を漏らした。

「あ…………」

見上げた視線の先に、女性が立っていた。

クラウスは突然目の前に現れた教育係に、恐る恐る尋ねる。

「フレアさん…………どうしてここが?」

「部屋に痕跡が残つっていました。……王子! こんな所にいて、『アサシン』に襲われでもしたらいどうする御つもりですか!? 転移魔術を習得したからといって無闇に使うのはおやめなさいと何度も申し上げたはずです! あれは護身のためにお教えしたのですよ!」

思わず耳を塞いだクラウスを、フレアは厳しい顔で見つめた。

王子をここまで叱りつけるのには訳があつた。

殺人組織『アサシン』が動き出したのである。

比較的大規模なその組織は、王族を狙うことが多い。

手当たり次第に各国の王族の血を断ち切つてゆくので、世界中から危惧されている。

一月前、近隣の国の王子が四肢を切断され殺された。

一月前、隣国の王女が心臓を一突きにして殺され時計台に吊るされた。

しかしそれらの殺人事件で目撃者は皆無。さらに一切の証拠は隠滅されている。

事件の前に届く一通の手紙だけが、それが『アサシン』の仕業だと告げていた。

今月になり『アサシン』がルツセル国に入ったと噂されるようになり、王城の者達は警戒を強めた。

標的であるクラウスを守るため、彼の部屋には何人もの騎士と魔術師が並び、数時間毎に入室し王子の安全を確かめている。

しかしクラウスはそんな危機や警備に全く興味を示さず、それまでのように部屋を脱しては城下町を徘徊していた。

「さあ、帰りましょう。皆が心配しています」

フレアが小声で呪文を唱え、一人の姿は搔き消えた。

机の上には、手つかずのままのケーキとその代金だけが残されていた。

そんな毎日が続いていた。

クラウスが気づかれぬよう脱走し、それをフレアが連れ戻す。

その後談話室で話し合いもとい説教が行われる。

クラウスは、それが崩れることなどないと信じていた。

それ故、隙を見て部屋を抜け出すことを止めなかつた。

静かな部屋でフレアの話を聞きながら、クラウスは密かに微笑む。

ああ、今日もまた何事もなかつた

と。

そしてその時間だけが、唯一他の護衛がない時間だつた。

談話室の窓が、唐突に割れた。

何の前触れもなかつただけに、二人は驚いてそちらを見つめる。

硝子の破片が、窓の近くに座っていたクラウスに飛ぶ。彼に当たるより早く、破片はフレアの呪文で消え去つた。

立ち上がったクラウスを自分の背中に隠しながら、フレアは窓を見つめた。

風や多少の衝撃では割れないよう魔術がかけてあるはずだつた。それが破られたということは何者かの魔術しかありえない。フレアは緊張しながら呪文を唱えた。

二人の周りに、見えない結界が現れる。

次の瞬間、部屋に何かが飛び込んできた。

灰色の装束を着た男。

「『アサシン』…………」

クラウスは無感情に呟いた。

灰装束は、『アサシン』が好んで着る物である。

「何の用ですか？」

フレアは鋭い視線を男に向けた。

敵は鎌らしきものを両手に持つたまま、クラウスを見つめている。クラウスも、油断のない目つきで男を睨んでいた。しかし男は一人を襲う様子もなく、懐から白い封筒を取り出した。それを床に置き、呪文を呟いて姿を消す。

「手紙…………？」

何の気配もない、と判断したクラウスが結界を出て封筒を拾い上げた。

そつと開き、中の紙を取り出す。

【明日の〇時に、クラウス王子を頂く。】

殴り書きされたような字のその文章は、明らかにクラウスの誘拐を予告していた。

「王子…………」

予想していたもののあまりにも唐突な宣言に、フレアは身震いした。

しかし覚悟を決めて、クラウスの灰色の瞳をしっかりと見つめる。

「必ず、お守りいたします」

震えているものの、はつきりとした声だった。

クラウスは悲しげに、割れた窓を見やる。

崩れてしまつた日常に哀愁を覚えながら、教育係に向かつて頷い

た。

「うん……」

2・王子暗殺事件

「もうすぐだね…………」

クラウスがフレアを見上げて言つた。

フレアは緊張した様子で、静かに頷く。

時刻は、23時を回っていた。

クラウスの部屋には、フレアを含む城の魔術師が6人、騎士が3人が集まっていた。

王子を守るべく、いつでも戦えるよう身構えている。

クラウスは愛着している緑色の長いマントをいじりながら、そわそわと部屋の中を見回す。色々と大切なものが隠してあるため、何かの拍子に見えてしまわないか心配だった。

質素な服装の護衛達の中で一人王族の紋の入ったマントを着ているクラウスは、いささか目立ちすぎていた。

0時まで、あと僅か。

全員が、心中でカウントダウンを始めていた。

城の大時計が0時を打つた。

途端、部屋は白い光に包まれる。

「眩し…………」

一瞬で消えた光の後、部屋は変わらぬ姿を見せる。

しかし、王子の姿はどこにもなかつた。一瞬で、忽然と消え失せていた。

「何が起きたの！？」

「魔術防御は！？」

「万全の状態です！」

「何者かの侵入は！？」

「確認されていません！」

「ならどうして……」

「…………」

王子、と呼びかける声が部屋にこだました。しかし、返事はどこからもなかつた。

窓がないその部屋は、地下のようだった。

【特別制御室】と書かれた扉は固く閉ざされ、出入りはできそうにはない。

石で造られているそのホールのような広い部屋には、人間が二人いた。

一人は、まだ幼い銀髪の少年。

「いたた……」

クラウスは打ちつけた肩を擦り、声を漏らした。よろよろと立ち上がり、辺りを見回す。

「あれ……ここは…………？」

不安げな声で、目の前の灰装束の男に尋ねた。前日に窓から入ってきた者とは違う男。

「クラウス・ルツセル」

男はクラウスの問いには答えず、淡々と言つ。

「ルツセル國16代目国王の第一子で、今年で11歳を迎えた。うむ、間違いないな

「何が…………？」

11歳といえば、魔術と剣術の授業が始まる時期である。クラウスが今までに教わったのは、初級レベルのものばかりだった。

それ故、縛られることも口を塞がれることもなく連れてこられたのだ、とクラウスは理解した。

「」は我が組織『アサシン』のこの国での活動拠点だが？」「

「うう……いいもん。きっとフレアさん達が来てくれるから」

クラウスが拗ねたように呟くと、男は可笑しそうに口の端を歪めた。

「それは不可能だ。」は同業者しか出入りできん」

男の渴いた笑いに、クラウスは顔をしかめた。

思考を巡らせ、疑問を口にする。

「どうやって……僕をここに？」

「お前の部屋には魔術を仕掛けた。魔術防御がなされるずっと前からな。あのシステムは元々張つてある魔術には通用しない」そんな危険な場所に今まで住んでいたのか、とクラウスは身震いした。

といつても薄々感づいていたため、驚きは薄い。

「僕を……殺すの？」

怯えた声音で、クラウスはそう尋ねた。

男はにやにやと笑つたまま頷く。

「当然だろうが。そのために誘拐した。お前は」で死ぬ」

大きな鎌を構え、男はクラウスの体を両断せんと走り出した。クラウスはそれを見つめ、にこりと笑う。

「あははっ！」

軽快な笑い声を上げ、クラウスはさつとそれを避けた。

突然の変貌に、男は驚きの表情を浮かべる。

一瞬、思考が停止した。遅れて、それまで怯えていたのが演技だったと理解する。

クラウスは緑色のマントをなびかせ、楽しそうな笑顔を見せた。

「僕を殺す？じゃあおじさんは僕に殺されても文句は言えないよねっ！」

「なつ……お前、自分の立場が分かつているのか！？」

男はそう怒鳴りながらも、背中を冷や汗が流れるのを感じた。

目の前の子供は、自分が殺されることを恐れていなかった。そして、

相手を殺すことに楽しみを感じている。考え、男はそれを否定した。
恐れていないのではない。自分が死ぬということを全く考えていないのだ。それに、殺すことが楽しいのではない。相手を凌駕するこ
とが楽しいのだ。

そしてそれは、実現されている。

殺しを宣言した瞬間クラウスの周りの空気が変わったのに、男は
気づいた。

膨大な量の力を、クラウスから感じていた。
「この部屋で魔術は使えないぞ」

「知ってるよ？」

クラウスは気づいていた。部屋が、魔封石で造られていることに、
魔封石は、ただの石ではない。

全ての魔術を吸収し無効化する、魔術師が最も恐れるものだった。
しかしクラウスは、その魔封じを解く呪文を知っていた。どこか
で読んだ、上級魔術の本に載っていたのを覚えている。高度で、大
人の魔術師が何年もかかつてやつと習得できるほど魔術だ、と書
いてあつたことも。

「面倒だし……剣術でいいか」

クラウスはつまらなげにマントの下から剣を抜いた。

王族の紋が彫られた、まだ新しい剣。

いつもの無邪気で弱々しく保護欲を誘う表情はどこへ行つたのか、
クラウスは幼い顔に不敵な笑みを浮かべていた。

焦りを感じながら、男が鎌を振り下ろす。

クラウスは剣を持つた片手でそれを受け止め、弾き返す。

男は怯まず、次々に切りかかった。

避けたクラウスに、容赦なく凶刃を振るう。

「ルッセルの王家はね、代々剣術の才能に恵まれてるんだよ？」「知つて
いる。だが……」

男は鎌を構えつつ、早口で何かを唱えた。

「剣術と魔術を併用すれば、こちらにも利はある

途端、見えない力が作用し、クラウスを石壁に叩きつけた。同時に、ばき、と骨の折れる音。

「肋骨でも折ったか。動けまい」

クラウスはぐつたりと床に横たわった。その口が、小さく動く。「呪文でも唱えているのか？それとも祈っているのか？どちらにしろ、お前は終わりだ。たとえ魔術が使えようとも、初級程度ではどうにもならん」

男は勝ち誇った笑みを浮かべた。

小生意気な子供を痛めつけることに成功し、喜んでいる。

クラウスはそのまま集中し、やがて溜息を吐く。赤い血が零れる。

声はあまりにも小さく、男の耳には届かない。

「む」

不意に、男が外へ意識を向けた。その際に、小さく呪文を唱える。魔術で鋭敏化された聴覚で、地上の音を聞き取った。

しばらくそのまま集中し、やがて溜息を吐く。

「……流石は優秀なルツセル国の魔術師だ。もうこの辺りを嗅ぎ回つている」

男はクラウスに向き直った。

「別れの時だ、王子。私もこれ以上ここにいると見つかってしまう」そして、大声で呪文を唱える。

クラウスも知っている、破壊の呪文。

男は皮肉っぽく倒れたままのクラウスに一礼すると、自分は魔術でどこかへ去つた。

部屋には、伏せついたクラウスだけが残される。

上方で、大きな爆発音が響いた。それと同時に、部屋全体が轟音を立て始める。

ちょうどその時、クラウスは呪文を唱え終えた。

「間に合つた…………」

部屋が崩壊しそうであることを悟りながら、天井を見上げる。既

に魔封石には亀裂が走り、今にも崩れ落ちようとしていた。

安堵の息を漏らし立ち上がるクラウスの横に、瓦礫が音を立てて落ちた。それを触り、クラウスは溜息を吐く。

「直接魔術では防げないかあ…………」

呟いた次の瞬間、真横から飛んだ壁の破片がクラウスの左肩を抉つた。

無論、肋骨は完治していた。

数分後、クラウスが監禁されていた建物は全壊した。言つまでもなく、彼のいた地下11階は押し潰された。

3・夜明け

爆発音は、遠く離れた城にまで届いていた。轟音が、地面を震わせる。

クラウスを捜し回っていた捜索隊は嫌な予感を感じて震え上がり、城下の人々は眠たげに瞼を擦りながら何事かと目を覚ました。

「情報が入りました」

城の下級魔術師のその言葉に、フレアは瞬時に反応した。
「何か分かったの！？」

魔術師は静かに頷いた。しかし、その顔は暗い。

「城下町でビルが倒壊しました。『アサシン』を始めとする殺人組織が頻繁に出入りしていた、魔法制御建造物です。関係者は制御を無効化できただようですが……それ以外の者は入ることさえもできない、危険な建物でした。ちょうどその付近で捜索を行っていた部隊が、現在調査に当たっています」

フレアは嫌な予感を覚え、恐る恐る尋ねる。

「では、王子はそこに…………？」

「はい、恐らく。倒壊で剥き出しになつた地下への通路が発見されすぐに向かわせましたが、地下1～1階で途絶えているようです。そこから、王子の物と思われる血液や肉片などが発見されたとのことです」

「それだけなんですか…………王子は…………？」

フレアは唇を噛んだ。少しでもクラウスが生きているという証拠が欲しい、と視線で訴える。

しかし魔術師は、申し訳なさそうに目を逸らし伏せた。

「特殊な魔封石で造られているらしく瓦礫を移動できないので詳細

は不明ですが……爆発は各階で起こり、地下11階の部屋には強力な魔封じがかけられていたようです」

「…………
「…………失礼ですが、スタージュ様は王子が生きておられると思いませんか？」

「不謹慎を自覚しつつも、魔術師は尋ねる。そして次の瞬間、後悔した。

「…………信じるしかないではありませんか」
その蒼い瞳には、光さえ灯つてはいなかつた。

「夜明けって綺麗だなあ

城下町から少し離れた、小高い丘。

凶暴な獣の出没が相次いでいるため、近寄る者はいなかつた。

血を垂らしながら、クラウスは座つて朝陽を眺める。

クラウスは夜明けの瞬間を見たことがなかつた。

それまでに、フレアに眠らされてしまつていた。

しかし、そんな生活はもうない。崩れてしまつた。

初めて見る夜明けの太陽のあまりの眩さに、クラウスは目を細めた。

「…………うひ

同時に肩の痛みを思い出し、クラウスは顔をしかめる。

今まで興奮状態にあつたせいで忘れていた痛みが、今はしつかりと感じられた。

ちらりと、自分の怪我を確認する。

左足は無事なもの、右足は原型を留めないほどに潰れ、血が絶え間なく流れ出している。

両肩は削れ、白い骨が見えていた。

クラウスは、落ち着いて呪文を唱えた。治癒の呪文は、ずっと前

に魔術書で読んでいた。

欠けた肉が再生し、血の気が戻つてくる。

痛みも消え元通りになつたのを確認し、クラウスは立ち上がつた。

部屋が崩れてゆく中クラウスが唱え終えたのは、解魔封の魔術だつた。

正確には、魔封じを解いたのではない。魔封石に誤認識させたのだ。

部屋の魔封石には、関係者以外の人間の魔術を吸収する性質があつた。

クラウスはそれを利用し、自分を『アサシン』の人間だという情報を魔封石へ送つたのだ。

その認識魔術を、クラウスは唱えていた。

解魔封の方が容易だつたにも拘らず。

解魔封魔術を使つていれば、もつと早く脱出できた。しかしクラウスは、わざわざ認識魔術を使つた上、その後しばらくその場に残つていた。

爆発から身を守る魔術も弱いものしか使わず、故意に怪我を負つた。

それは全て、クラウスが死んだと思わせるため。

クラウスにとつて、城での日常はひどくつまらないものだつた。

フレアと話す時間は楽しいものの、授業の内容は本で読んだものばかり。剣術や魔術も、すぐに使えるので飽きてしまつていた。

そんな生活から解放されたのだ。

クラウスは、城に戻るつもりなど毛頭ない。新しいものを求めていた。

今の彼にすると、まだ見たこともない外の世界。世界を見て回ろう、とクラウスは思った。

死んだふりをすれば、捜し回られることもない。

心おきなく旅に出られることに、クラウスは歓喜した。城に未練はなかった。

（いつか無事で帰ればいいよね。フレアさんとかすごく怒るだらうけど……あれ、喜ぶかな？）

想像して、クラウスは満面に笑みを浮かべた。

最優先すべきは、自分の容姿だった。

銀髪で灰色の目を持ち縁のマントを羽織った少年。それだけで、国の誰もがクラウスを思い浮かべることだろう。クラウスは、もつと目立たない格好をすればよかった、と今さらながらに後悔した。自分を目撃した人が出てしまえば、素も子もない。そして痛い思いをした意味もない、とクラウスは辺りに誰もいないことを確認した。

人差し指を、自分の髪に当てる。

クラウスが小さく呪文を唱えると、髪はその部分から徐々に変化を始めた。

日光に照らされ光る髪は銀色から漆黒へ変わる。まるで丁寧に絵の具で塗りつぶしたような変化だつた。

瞳の色も、灰色から落ち着いた濃い茶色に染まってゆく。

透き通るように白かった肌は健康的な小麦色に。あどけない童顔は大人びた細い顔に。

王族の剣からは輝きが失せ、光沢のない古びただの剣に、マントは金色で刺繡してあつた王家の紋が消え、ありきたりな茶色のマントに成り下がつた。

実体どころか本来の力までもを覆い隠し、別のものに見せる変化魔術。

それ自体は初心者でも簡単に習得できるものだが、発動後のコントロールが至難な魔術。

制御が甘いと、優秀な剣士や魔術師には見抜かれてしまう。つまり、本来の実力を制限するほど、見抜かれる確率が低くなる。クラウスは、自身の並々ならぬ魔力を最大限封じることにした。無意識の魔力の放出はある程度抑えることができる。これまでもそうやって周囲の注意を逸らしてきた。

自分にフレアをも超える魔術の才能があることを、クラウスは理解していた。しかしそんなことを周囲に知られてしまえば無駄に騒ぎ立てられ、面倒になるだろうということも。戦国であるルツセルでは祭り上げられ、早々に戦場へ向かわされるだらう、とクラウスにとつて悩みともいえることだった。

剣術の才能もあつたが、魔術には劣る。そのため、クラウスは力の制御は弱くした。それは護身のためというより、安心感を得るためにの行為。

自身が弱くなつてしまつことに、クラウスはやはり不安になるのだった。

「うーん……」

顔をしかめ、クラウスは首を傾げる。

「こんなに制限しちやつて大丈夫なのかな…………」

答える者はいない。いつもなら疑問はフレアにぶつけるクラウスだが、そうはいかなかつた。

自分の隣に教育係がないことを思い出し、少し寂しく思つ。

(……まあ、いいか)

自分ではまともな結論を出せそうにない、と判断し、クラウスは無理矢理自分を納得させた。

どうせ術を解けば全て元に戻るのだから大丈夫だ、と言い聞かせる。そして、それは事実だつた。変化を解けば自分は負けないだろう、と確固たる自信を持つ。

深呼吸を一つして、クラウスはくるりと城と街に背を向けた。

「これで、どう見ても一国の王子には見えないよね？」

確認するよつこ茘き、田の前に広がる森へと、一歩踏み出した。

「私も捜索に当たります」

国一の魔術師でありクラウス王子の教育係であるフレア・スター

一ジュは、普段にも増して真剣な顔で告げた。

『アサシン』のビルの中で生命存在痕跡が残されていたのは、地下11階の特別制御室だけだ、と連絡を受けた直後のことだった。それを聞くなり、フレアは緊張した面持ちで現地へ向かった。

積み上がった大量の瓦礫。搜索を滞らせている要因。

不安定で立つことが難しいため、一同は魔術で作った透明な床の上に立っていた。端から見れば、空中に浮いているように見える。「この魔封石の封じを解除します」

フレアがそう宣言した途端、周囲の魔術師達がざわめいた。そんなことができるのか、と呟く声が、辺りに広がった。

フレアはそれを耳に入れず、朗々と呪文を唱え始める。話し声はぴたりと止んだ。

暗記するだけでも困難な複雑で長い呪文が、辺りの空気を震わせる。

十数分ほど呪文を唱え続け、フレアはようやくその口を閉じた。使うのは初めてだった上に部下の前なので失敗するわけにもいかず、省略していない大元の呪文を唱えたので時間がかかったのである。

次いで、フレアは効力を失った瓦礫を取り除く呪文を唱えた。その顔に、疲労は見られない。

しかし、瓦礫の下から現れたのは一際大きな血溜まりと、模様のようない点々とある血の零のみ。

「王子……クラウス王子……？」

フレアは信じられないといった風に呟いた。

血の池の傍に膝をつけ、脱力したように頃垂れる。

固まりかけている赤黒い液の中には、小さな白い欠片が混じっていた。それは骨だった。

「爆発に……巻き込まれたのでしょうか」

隣にやってきた魔術師が、呟いた。フレアは答えない。

魔術による爆発が起きると、その場は灼熱地獄となる。巻き込まれれば跡形も残らないことも多い。

フレアはそれを、自分で否定する。否定しなければ、息を殺されなかつた。

王子は死んでなんかない、と心が悲鳴を上げる。あんなに元気で無邪氣だったのに。悪戯好きで、いつも私を困らせていたのに。ああ、きっとそこの瓦礫の陰にでも隠れていて、皆を驚かすつもりなんだ。

しかし、現状は容赦なくフレアの希望を打ち碎いた。

その部屋にあるのは、血と瓦礫と埃の臭いだけだった。

崩れる地下の密室から力ずくで出られるほど王子はない。魔封じが解かれた形跡もない。

そして、大量の出血の跡。

それは小さな子供の生命を奪うには十分な量だった。再生魔術がなければ数時間持てば良い方だ、とフレアの知識が訴える。再生魔術は高度な術で、王子が習うのは5年も先だった。

どう考へても、クラウスが生きている可能性はないに等しい。

そのことを理解してしまえることが、フレアには余計に辛かつた。

「スター・ジユ様、あれは…………」

一人が、フレアから離れた床を指差した。僅かに反応し、そちらへ目を向ける。

点々と続く血の先に、文字が描かれていた。

黒ずんだ赤で書かれた文章。

【皆今までありがとう。さようなら。また会つ日まで…………】 クラ

ウス・ルツセル】

それは間違えるはずもない、見慣れた王子の筆跡。

フレアの目から、透明な雫が零れ落ちた。

「王子…………」

誰も喋らない。辺りは無音だった。

「貴方が先に旅立つてどうするのですか…………一人で出かけてはいけないと、いつも言つていたでしょ…………？」

息子のようだつた。

王子が生まれてまもなく、18年間の教育と世話を言い渡された遠い過去の記憶。

家族のいないフレアにとって、クラウスは息子だった。唯一自分と一緒にいてくれる、大切な存在だったのだ。

それが、こんなにもあっさりと消えてなくなつてしまつ。

11年間の王子の姿が、脳裏に蘇つては消えた。

「王子…………」

誰も、声をかけなかつた。

何の前触れもなく、くしゃみが出た。

同時に誰かに呼ばれたような気がして、クラウスは振り返る。

「あれ……誰か呼んだ?」

クラウスは呼びかけた。しかし、反応はない。

ただ、木々が風にさわさわと揺れているだけだった。

5・誤解

偽名は、既に用意してあつた。

エスラル・シユーラン。

特に深く考えたわけでもない、他愛のない名前。

四日後。

（フレアには悪かつたかな…………）

エスラルは溜息を吐いた。城に心残りはないつもりだった。しかし、生まれてからずっと共に過ごしてきたフレアの存在は大きかった。

そしてきっと一番悲しんでいるのは彼女だろう、とエスラルは思う。フレアがエスラル以外の他人と仲が良さそうにしているのは見えたことがなかつた。

小さく呪文を呴き、マントの下から龍笛を取り出した。すう、と大きく息を吸う。

静かに、低い音を出した。最初は小さく、だんだん大きく。龍の咆哮を思わせる鋭い音を混ぜながらも、柔らかで力強い音色を辺りに響かせる。

数分程度の短い演奏を終え、エスラルは大きく息を吐いた。

慣れないことをした、とエスラルは近くの岩に腰かけた。

龍笛自体は、何度も吹いたことがあつた。ルツセルの象徴は龍。式典などでは国王が龍笛を吹奏する習慣があるため、エスラルはその練習をさせられていた。

しかし、王子にその役が回つてくるのは王位継承後。まだ国王として十分やつていける年齢である現国王が引退するまで、かなりの年数があるだろうと言われている。

そのため、エスラルは龍笛の練習を真面目にしたことは少なかつた。しかし、それだけでもルッセル王家の笛の才能は健在である。それほど練習を重ねなくとも、エスラルはある程度上達しているのを感じていた。

そして、真剣に吹いたのはこれが初めてだった。普段では聞くことのない、彼独特的の吹き方。

奏でたのは国家。それを、エスラルは魔術の球に封じ込めた。伝えたい相手だけに音を届ける、中級の伝達魔術。

「フレア・スター・ジユ」

エスラルがその相手の名前を呟くと、透明で泡のような球が城の方へと浮かんでいった。

「これで気づいてくれるかな？」

考えて、違和感があることに気がついた。

エスラルは誰にも本気で笛を聴かせたことがなかった。そう、フレアさえにも。

フレアは、悲しみに明け暮れていた。

フレアだけではない。城に仕えている者のほとんどが、王子の死に大きな衝撃を受けていた。

前々から襲われるところか分かつていていたのに、防ぐことができなかつた。その上、見つかつたのは肉片と骨のみ。葬儀では、棺が開けられることはなかつた。その罪悪感に苛まれ、いつもは賑やかな城内もひつそりと静まり返つている。

自室の椅子に腰かけたフレアは、大きく溜息を吐いた。

その蒼い瞳は、光が灯るどころか濁つたように疲れを滲ませている。王子からの最後の言葉を見つけてから、フレアは一言も喋つていなかつた。国王に言葉をかけられた時も上の空で、頭の中は王子のことで埋まっていた。

そんな状態でも、フレアの魔術の感覚は正常に働いた。部屋に向かってくる魔術の気配を感じ、閉じていた目を開く。

攻撃魔術ではないと分かり、フレアは再び眠るように瞼を下ろした。でもどうでもいい、とフレアは思った。たとえあれが攻撃魔術で、この部屋を私ごと吹き飛ばしたとしても、抵抗するつもりはない。どうせ、私が死んで困るのは重宝してくれている国王だけなのだから。その国王にしても、私を戦力としてしか見ていない。なら、私は死んでもいいじゃないか。

自嘲するように、フレアは口の端を吊り上げた。

次の瞬間、開け放たれた窓から泡のようなものが入ってきた。伝達魔術で作られた、魔術の球。

フレアは目を開けない。何か重要な伝言であつても、聞く気はなかつた。

しかし本人の意志に関わらず、その球は割れた。

そして流れ出したのは、笛の音。龍笛で奏でられた、国歌だった。フレアははつとして目を見開いた。

つい先日まで王子に教えていたその演奏は、模範を上回っていた。

「.....」

フレアは椅子から勢い良く立ち上がった。

「誰ですか！ そんなに私を打ちのめしたいのですかっ！？ なりさつさと殺せばいいでしょう！！」

自暴自棄染みた言葉。

フレアはこれが王子の演奏だとは気づかなかつた。勿論、王子が全ての授業において手抜きをしていたということにも。

フレアと敵対する誰かからの嫌がらせとしか思えなかつた。しかし、そんな不謹慎なことをする輩が城内にいるとはフレアは思わない。

残るのは、かの殺人組織。

「『アサシン』.....！」

呪うように言つた後、呪文を呴く。

途端、フレアの姿が部屋から消えた。

「あれ、崖かな？」

エスラルは前方で突然消えている地面を見つめた。その下からは、水の流れる音が響いている。

立つたままだと何かの拍子に落ちてしまいそうで、エスラルは屈んだまま眼下を覗き込んだ。

予想通り、川が流れていた。上流なのか、勢いが激しい。一度身を攫われれば抜け出すのは困難だろう。そして、水面からは鋭く尖った岩がいくつも突き出ている。人間一人なら完全に串刺しにできるほどの長さ。その先端に見える黒ずんだ染みを発見して、エスラルは身震いした。どうやら、ここは自殺場所に最適らしい。早く立ち去ろう、と後退しようとした。

と、唐突にエスラルの横に女性が現れた。驚いた拍子に、危うく自殺者に仲間入りしそうになる。

なんとか踏み止まり、エスラルは出現した女性を見上げた。

「あ…………」

その顔は、紛れもなく見慣れた教育係のもの。エスラルは硬直した。

「えっと…………？」

混乱するエスラルに目も暮れず、フレアは一步前に踏み出した。
(落ちる気ー?)

エスラルは慌てて立ち上がり、フレアの腕を掴んだ。

周りが見えていなかつたらしいフレアは驚いて、彼の顔をまじまじと見つめる。

気づかれないと冷や汗を流しながら、エスラルはフレアを見つめ返した。そして、驚いた。王子と会話している時に見せる楽しげな表情は欠片もなく、その表情からは絶望と憎悪が見て取れる。

フレアのそんな顔を、エスラルは見たことがなかった。僅かに、罪悪感を覚える。自分がいなくななければ、フレアはこんな所に来ることもなかつた。エスラルは、自分が他者に与えていた影響を考えてもいなかつた。自分の存在の大きさなど、微塵も頭になかつた。

「あの……落ちないでください」

はつきりと、言った。

どちらかというと懇願するような視線をフレアに向け、エスラルは困ったような顔をする。変化を解けば、フレアの自殺を止められるが、それでは意味がない。しかし、見殺しにするわけにもいかない。

しかし、フレアはエスラルの予想に反し、手を振り払つた。

「もういいの！貴方には関係ないでしょーー！」

（大有りだよフレアさん……………）

エスラルは困り果て、溜息を吐く。

「あのですね、子供の前で教育に悪いもの見せないでくれませんか」教育という言葉に反応し、フレアが振り向く。しばらくエスラルを眺め、その目に涙を滲ませた。

初めて見るフレアの涙に、エスラルは戸惑いながらも言つ。

「良かつたら、何があつたのか聞かせてもらえませんか？」

フレアが僅かに首肯したのを確認し、エスラルは安堵の息を吐いた。

6・説得と旅立ち

「えっと…………」

エスラルは激しく後悔をしながら声を上げた。

冷や汗が、背中を伝づ。

（そういえば、授業で真面目に吹いたことなかつたなあ…………）
なんでもう氣づかなかつたんだ、とエスラルは自分を叱る。フレアが
勘違いすることなど、よく考えれば分かつただろうに。まさかあれ
が引き金になるとは思わなかつた。

話を終えたフレアは、何も見ていない目を下に向けていた。

「大変だつたんですね…………」

それはありきたりな言葉だつたが、エスラルの素直な感想でもあ
つた。

フレアが僅かに顔を上げる。

自棄になつていたフレアは、エスラルに全てを話した。

自分が親を殺され孤児になつたこと。魔術の才を認められ、将来
城に仕えることを条件に学費全面免除で魔術学校への入学を許可さ
れたこと。友達は一切できなかつたこと。王子の教育係に任命され
たこと。それで初めて自分に自信が持てたこと。若くして国一の魔
術師と呼ばれ国王に期待されていたこと。しかしそれは戦力として
でしかなかつたこと。殺人集団が国に入つたと噂されたこと。その
集団に、王子が殺されたこと。その王子を本当の子供のように思つ
ていたこと。それが突然消えて、自分の世界が崩れてゆくのを感じ
たこと。そして『アサシン』から陰湿な悪戯があり、もう何もかも
どうでもよくなつたこと。

（いや、最後のそれ僕からなんだけど…………）

しかしそれを告げるわけにはいかなかつた。知れば、フレアはす
ぐにでも城へ飛んでしまつだらうから。そして何より、エス
ラルはフレアに叱られるのが怖かつた。

エスラルはそれには触れず、言い聞かすよつに言った。

「でも、やつぱり自殺は駄目ですよ」

「王子がいなら、私は生きていたくないの」

「大切な方だつたんですね…………」

フレアの中の自分はそんなにも大きかつたのか、エスラルは素直に驚く。

先程飛び降りよつとしていた時の激昂も收まり内心ほつとしながら、エスラルは苦笑を浮かべる。

「それじやあ……さようなり」

フレアが、不意に崖に足を向けた。

「ちょっと待つてください！！」

エスラルは焦り、大声を上げる。

しかし、フレアは止まる様子がなかつた。

「これじや、『アサシン』の思うつぼじやないですか！」

エスラルの咄嗟の一言に、フレアはぴたりと足を止めた。

フレアはそれを全く考えていなかつたと見て、エスラルは説得にかかる。

（思うつぼも何も、あいつらのせいじゃないんだけどな…………）

勝手に責任を押しつけ申し訳なく思いながらも、そういうこととして話を進める。

「『アサシン』が王族を狙うのは、その国を弱体化させたいからじゃないんですか？ルツセルはこの辺りでは力を持つている国だと聞いています。王様が貴女を戦力として見ていたなら尚更排除したいと思うはずです。国一の魔術師なんでしょう？なら、復讐でも何でもしてやればいいじゃないですか。死ぬのはそれからでも遅くないと思いますよ」

驚いて目を見開くフレアを見ながら、エスラルは内心呆れた。いつも思慮深くなれと言つてゐるのに、僕がいなくなつた途端に嫌な考えに固執するんだから…………。

「そうね…………」

フレアの眩ま。

「復讐……王子のためにも、やらなければいけないわ。何もせずに終わつたら、向こうで王子に怒られる」

（あー……フレアさん白い人なのになんか復讐とか黒いこと教えちやつた気がする……ていうか、フレアさんって、こんなに単純な人だつたつけ？）

崖に背を向けるフレアを、エスラルは複雑な気持ちで見つめる。しかし、とりあえずでもフレアが生きる理由を持つてくれたことに安心もしていた。やれやれ、と首を振る。

そして、手を差し伸べた。

「一緒に、行きませんか？」

え、とフレアはきょとんとした。その顔を優しく見つめながら、エスラルは微笑む。

「俺……も、あいつらには少し恨みがあるんですよ。一緒に行きましょう？」

慣れない一人称に戸惑いながらも、エスラルは言い切つた。嘘ではない。誘拐は立派な侮辱だった。

フレアは不思議そうな表情でエスラルを見つめる。気恥ずかしくなり、エスラルは頬を赤くした。

「…………あ……えっと、迷惑ですか…………？」

弱々しい口調で尋ねる少年に、フレアはくすりと笑みを零す。やつと笑つてくれた、と明るくなるエスラルの思考は、次のフレアの言葉で停止した。

「いえ……貴方、なんだか雰囲気が王子に似てるなあつて思つただけ……」

エスラルが過剰に焦つたのは言つまでもない。

「私はフレア。フレア・スター・ジユ。貴方は？」

「エスラル・シユーランといいます。……どこに行きましょうか？」

「とりあえず、悪い噂がある所にでも行きましょう。『アサシン』が関与している可能性のある場所は全て当たるつもりよ」

「はい……」

熱心なフレアに苦笑しながらも、その目に僅かに光が戻ってきているのを、エスラルは確かに見た。

7・救助

「私、魔術は国一つで言われるけど、剣術はからきし駄目なの。貴方は？」

「えっと、俺は魔術は全くです。剣術は親に散々教わったんで」「身長差が30cmほどある一人は、並んで道を歩いていた。

背の高い方は真新しい灰色のマントの下に質素な黒いドレスを着ていて、首には城の印が入ったペンダントを提げている、まだ20代らしい女性。

低い方は上等でけれど動きやすい軽装の上に丈夫そうな旅用の茶色いマントを全身に纏つた、10代前半の少年。

「そういえば…良かつたんですか？城の方に知らせなくて」エスラルの言葉に、フレアは溜息を吐く。

「それが、あまり良くないのよ。そのうち連れに来るわ」

「その時は味方します」

「ありがとうね」

今になつて、フレアは毎回脱走していた王子の気分を味わつていた。

(でも、なんだか…楽しい気分)

王子の死からまだなかなか抜け切れていないはずなのに、フレアは微笑んだ。

「大丈夫です、スター・ジユさんは渡しません」

につっこり笑うエスラルの顔はどこか王子を思い出させて、フレアは安心感を覚えた。

「や…止めてください」

町に入つて早々、二人は足を止めた。

此処は、殺人鬼がいると言われている町。

若い娘が一人、大柄な男達に取り囲まれていた。

場は野蛮というよりは陰悪な雰囲気に包まれている。

その雰囲気 자체が近寄るなと言つていいようで、野次馬はいなかつた。

「お前の親父が殺人鬼だろ？！」

一人が怒鳴つた。

「娘なんだから、父親の居場所ぐらい知つてるだろー…言えーーー」
そうだそうだ、と声が上がる。

「俺の弟はお前の親父にやられたんだ！」

「俺なんか家族を皆殺しだ！」

どうやら、殺人鬼の容疑者の娘らしい。

少女は怯え、震えながら首を振つた。

「あの……知りません」

弱々しい返事に、男達はいきり立つた。

「ふざけんじゃねえ！」

「本当は知つてんだろう！吐けよー！」

憤怒は、次第に殺意へと変化する。

「だつたらお前が代わりに死ぬか？ああ！？」

右手に棍棒を持った男が、それを高く振り上げた。

だが振り下ろされた棍棒は、次の瞬間すっぱりと切斷された。

「あ？」

其処にいたのは、エスラルだった。

「いくら恨みがあるからって、やり過ぎじゃありません？」

古びた剣を片手に、少女を庇うように立つてゐる。

「お前、何だ？こいつの知り合いか？」

「いいえ。通りすがりの旅人です」

「じゃあなんで庇うんだ」

エスラルは答えなかつた。

答えられなかつた。

自分でもよく分からない。

ただ、助けたくなつたのだ。

同じような光景を、何処かで見た事があるような気がして。ある筈の無い記憶が、脳裏を過ぎつて。

助けなければ、と思つたのだ。

「俺が相手になりますよ」

男達は、一斉にエスラルに向かつてきた。

エスラルはやれやれと首を振り、剣を鞘に収める。

そして、鞘を持ったまま構えた。

怒鳴り声が、飛び交う。

エスラルは素早く、けれど的確に相手の急所を衝いていく。剣は鞘のままでも、十分凶器になった。

「凄い……」

フレアは驚いた様子で、エスラルを見つめている。

あの歳で、あんな速さは有り得ない筈だった。

ものの秒で男達を倒したエスラルは、少女に手を差し伸べた。相手は、エスラルより少し年上に見える。

「ありがとう」

「どういたしまして。……俺はエスラルです。貴方は？」

「カラーラよ、よろしく」

少女の短い茶髪が、風に吹かれて僅かに揺れた。

「へえ……貴方達、旅人なんだ」

三人は、静かな街中を歩いていた。

人はいるものの、どんよりとした空気が漂っている。

「なんだか空気が重いわね。事件の所為?」

フレアが言うと、カーラは悲しげに頷いた。

「そう。もう何十人も殺されてる。疑心暗鬼になってるのよ」

「それでカーラさんも……」

エスラルの言葉に、カーラはまた頷く。

「うん。さつきは本当にありがとう」

わざわざ立ち止まって、ペコリと頭を下げた。

顔を上げたカーラは、笑顔でエスラルを見つめる。

「当然の事をしたまでですよ」

エスラルは照れ笑いを誤魔化すように、空を見上げた。

そして、一言。

「あー」

気が抜けたような声に、カーラとフレアが不思議そうな顔をする。

「どうかした?」

「いえ・・・・さつき、この町の案内板見たんですけど」

エスラルは困ったようにカーラを見た。

「宿屋が1つも無いな、って」

「この町つて、あんまり人が来ないの?」

フレアは「コーヒーのカップを手に持ったまま訊いた。

「そう、だから宿屋が無いの。儲からないから」

「なるほど~」

カーラの家は、大きな屋敷だった。

広い部屋がいくつもあるが、そのほとんどは使われないまま埃をかぶっている。

「どうか、良かつたんですか？ただで泊めてもううなんてなんだか気まずいんですね」

エスラルがスプーンをくるくると回す。

「いいの。此処には私しか住んでないし」

「え？」

エスラルはスプーンを取り落とした。

カン、と音を立ててスプーンが床にぶつかる。

「……今、何かとても宜しくないこと考えたでしょ」

カーラがエスラルを睨んだ。

「いえ、考えてません」

エスラルは首を何度も横に振つて否定する。

「本当に？」

「本当に」

カーラは溜息を吐くと、自分の淹れたコーヒーを静かに飲んだ。
「親は、死んだの。遺産は結構あつたけどね」

無感情な声。

「あ……えつと……」「めんなさい」

エスラルは頭を下げた。

その時、

(あれ？)

妙な感じが、エスラルの頭に広がった。

「あの、使用人さんとかそういう人も、いないんですか？」

「ええ、いないわよ」

即座に返事をする、カーラ。

「……」

エスラルは考え込んだ。

「……どうしたの？」

カラの不思議そうな顔が、上向き加減のエスラルの視界に入る。

「いえ、何でもないです」

「そう」

エスラルの視線は、天井の一点に向いたままだった。

9・疑問の向く先

「犯人の手口とかって、分かってるんですか?」
食事中に、エスラルは唐突に言つた。

「へ?」

突然訊かれ、カーラは一瞬ポカンとした。
だが、すぐに口を開く。

「ああ、事件の話ね。……解決する気?」

「はい。俺達の探してる連中かもしだれないの」「

(…敬語なのに『俺』?)

カーラは疑問に思つたが、打ち消した。

(まあ、そういう人もいるのかも)

ちなみに、エスラルは本の中でしか『俺』という一人称を知らない。

つまり、敬語と混合して良いものと悪いものの区別がつかないと
いう訳で。

「犯人は、一度に何人も殺してるの。今までの犠牲者は皆、首か胸
を刃物で刺されて死んでるわ」

「そうなんですか……えっと、夜ですか?」

「そう、夜中。それとね、犯人は毎回、予告状を出してるのよ

「!」

エスラルとフレアは顔を強張らせた。

「予告状?」

カーラはこくんと頷く。

「でも、どんなに警備を固めても、その警備員諸共皆殺しよ
「そう……」

フレアはフォークを置いた。

「エスラル君」

「分かつてます」

アサシンでない可能性の方が高い。

アサシンは、貴族や王族など身分の高い者しか狙わないからだ。しかしそれは単なる噂なので、実のところは誰にも分からぬ。

「それで、次の予告状は届いているんですか?」

「まだよ」

カーラの言葉に、エスラルは考え込んだ。

可能性は、否定できない。

それに、

（話を聞いたからには、解決しなきや面目立たないよね……）
妙なプライドまで顔を出した。

（まさかこのまま「気をつけてー」とか言いながら去る訳にもいかないし）

結果、

「犯人探し、しましょうか」

「そうねえ」

即座に返事をしたフレアと一人、頷いた。

「えっと、まず食事しない?」

「あ、すみません」

カーラが困ったように呟いたので、一人はおずおずと食事を再開した。

「それと、今日はもう遅いから、明日にしたら?」

微笑したカーラに、エスラルは頷き、スプーンでシチューを口に運ぶ。

「そうですね、明日の朝からします」

カーラはそれを聞いて、にっこりと笑った。

その夜。

「何か疲れたあ……」

エスラルは割り当てられた、やけに広い部屋のベッドに寝転がっていた。

まだ夜は宵の口で、月は昇りかけている最中だ。フレアは眠ると書いて隣の部屋に引っ込んだ。

「……」

家に着いた時から、あの違和感は消えていない。何か、感じる。

「……ふああ」

欠伸を一つして、目を閉じた。

睡魔がエスラルを襲う。

首に向けて振り下ろされたナイフを、エスラルは剣の鞘で受け止めた。

ち、と舌打ちが聞こえ、相手は飛び退く。

「意外に遅かつたですね」

エスラルは横になつた体勢のままで言つ。シャキ、と鞘から剣が引き抜かれた。

「起きてたのか……」

ナイフを振り下ろした張本人の男が呟く。

「ええ。貴方達が煩いんで、眠れませんでした」

「……」

「ずっと、天井に潜んでいたんでしょう?」

エスラルはベッドから降り立つた。

月光に照らされたその姿には、半身ずつに光と影がくつきりと浮かび上がっている。

「さて」

エスラルは剣を構えた。

「……なんか、数多くありませんか?」

部屋には、15人ほど人がいた。
「複数犯だつたんですね、殺人鬼さん達」

「違和感は貴方達だつたんですね」

「そうだろうな」

先頭の男が小振りの斧を振り回しながら答える。

「カラさんには誰もいないと言われましたが、気配を感じたので「大したものだ」

エスラルは、隣の部屋の方へ目をやつた。

「ああ、隣にも送り込んだぜ」

エスラルの心内を察して、男は言った。

壁の向こうで、銃声が響く。

「スター・ジユさんなら心配要りませんね」

「そうか?」

「はい」

エスラルは頷くと、剣を構え直した。

「じゃ、こつちはこつちで片付けますから」「何い?」

男の視線がきつくなる。

エスラルは無視して、切りかかつた。

暗い部屋で、火花が散る。

エスラルは自分に向かってくる刃を次々と受け流し、剣を振るつた。

紅色の飛沫が部屋に飛散し、模様を作り上げていく。

「あれ、ずいぶん呆氣無いですねえ」

エスラルは剣を鞘に收めながら言つた。

そしてまだ息のある男に話しかける。

「リーダー的な人つて、この中にはいますか?」

「いないな」

男は荒い息を吐き出しながら、にやりと笑う。

「俺達は3つの組に分かれたからな」

「！」

エスラルはようやく思い出した。

この屋敷にいるのが、自分とフレアだけでは無いことを。
(なんてことを失念してたんだろう)

間に呑うことを探りながら、エスラルはカーラの部屋へと向かつた。

パン、と部屋に銃声が響いた。

「？」

ベッドから起き上がったのはフレア。

その目の前の結界に、銃弾が張り付いているのを見つける。

結界は肉眼では見えず、銃弾はただそこに浮いているように見えた。

「……なつ……？」

撃つた相手はかなり驚いているようで、宙に浮く銃弾を凝視している。

「なんで……魔術貫通弾なのに……」

「私の魔術にそんなもの効かないわよ」

フレアはざつと部屋を見渡した。

10人。

「襲撃？まあいいわ。……エスラル君は？」

「あの坊主か？今頃15人相手に苦戦してんじゃねえの？」

「……」

フレアは無言で、右手を上げて敵の方に向けた。

そして、何かぼそりと呟く。

途端、10人いた男達は消えていた。

跡には、灰が舞っていた。

「……」

隣の部屋から、話し声が聞こえた。

そして直後、バタンとドアが開く音がして、廊下を足音が駆け抜ける。

「あ、カーラちゃんが」

そこで思い出して、フレアは足音のした方へと一歩踏み出した。

「エスラル君っ！」

背後からフレアが追いついて、エスラルは振り返った。

「スター・ジユさん、大丈夫でしたか？：訊くまでもありませんが」

「エスラル君こそ。15人も行つたんでしょ？」

「大したことないです。……急ぎましょう」

二人は沈黙して、走り続けた。

「カーラさん！」

エスラルは勢い良くドアを開けた。

月光に照らされ、部屋の様子が浮かび上がる。

一人の男が、カーラに槍を向けていた。

「あ……」

カーラが呟く。

室内の残りの9人が、一斉にドアを開けた一人を見た。

「カーラさん一人に対しても10人ですか？」

エスラルは剣を抜く。

切りかかるより早く、フレアが呪文を唱えた。

部屋の中が一瞬明るくなり、すぐにまた暗くなる。

敵は半分に減つっていて、その5人は魔術を防ぐように手を出していた。

その手首には、魔封石のブレスレットが嵌っている。

「スター・ジユさん下がって！」

エスラルはそう言つて、剣を構えた。

周りの敵を薙ぎ払い、カーラに槍を向けている男に向かつていく。

突き出された槍は、その瞬間しゃがみ込んだカーラの頭上を通過

した。

男が叩き切られ、血が飛び散った。

倒れた体からも血が溢れ出し、床を汚していく。

「や……」

服に血が付き慌てて立ち上がったカーラを護るように、エスラルは敵の前に立つた。

4人の敵にそれぞれ一撃をくえ、気絶させる。

その動きは速すぎて、相手は対処する暇も無く床に転がつた。

次の瞬間

グサリという音がしたな、とエスラルは思った。

自分の腹から銀色に光る切っ先が覗いていることに気づくのに、そう時間はかからなかつた。

「な……」

エスラルの背後から、カーラのカーラの声が響く。

「結構早かつたわね」

背中からナイフが引き抜かれ、エスラルはびくんと痙攣する。

「犯人の一味、だつたんですか」

ほんの少し苦しげに、エスラルは声を発した。

ズブ、とまた音がする。

「そうよ。悪い？」

肩口に激しい痛みを感じながら、エスラルは答えた。

「ええ、悪いです」

次の瞬間、エスラルは床に倒れ込んだ。腹と肩から大量の血を流し、必死に意識を保とうと重い瞼を開ける。

「スター・ジュー、さん……あと、よろ、しく、お願ひ…します」部屋の入り口に立つたままのフレアに、エスラルは声をかけた。そして、ぐつたりと目を閉じた。

「あれ？ 死んだ？……死んでないわね」

カーラがナイフの先でエスラルを突く。

小さく上下するエスラルに、カーラは吐き捨てるように言った。「あんた、なんかムカつくのよね。そういう素直っぽい奴って、きっと何の苦労もしないのね」

憎しみを込めて、カーラは呟いた。

ナイフを、エスラルの首へと振り下ろす。

だが次の瞬間、その行為は中断された。

「……何？」

その手首を掴んでいるのは、フレア。

細い手首を、折れそうなほどにきつく握っている。

フレアは言葉を返さず、ただ何かを呟き続けていた。

「！」

フレアが呪文を唱え終え、カーラはようやく気が付いた。

この魔術師が、この部屋の仕掛けを全て解除させたことに。

「トラップの多い部屋だったけど……」

フレアは空いた左手で額の汗を拭つた。

「なんとか間に合つたわ。エスラル君のお陰」

カーラはフレアの手を振り払い、後ずさる。

「何故貴方が？」

フレアは悲しげな表情を浮かべ、訊いた。

静寂が、訪れる。

月が雲に隠れ始め、部屋はだんだんと暗くなつた。やがて、カーラが拗ねたような口調で呟いた。

「……誰も、私を認めてくれないの」

哀愁が込められたその答えに、フレアは顔を顰めた。静かな部屋に、カーラの声だけが響く。

「私の親は、濡れ衣を着せられていたの。殺人の罪のね。でも誰も信じてくれない」

「……」

「誰も、私を町の仲間として見てくれないの。皆、蔑みの目で私を見るし……」この町に、私の居場所なんて無い」

「……」

「両親はひつそりと町を出て行つたわ。何もしてない、善い人達なのに」

「……」

「だから、こんな町、潰してやる。この町に来た人も。これ以上、私の親のことを広めない為にも」

最後は涙声になりながら、カーラは断言した。

「人間なんて、嫌いよ」

フレアは立ち尽くしたまま俯いた。

認めてもらえない悔しさが、フレアには分かつた。

孤児から魔術師に成り上がり、周りから軽蔑されていたフレアには。

13・夜の惨劇

新月の夜の話。

暗い暗い小屋の片隅で、少女が一人、泣いていた。
傍らには、両親の死体。

その体からは、未だ血が流れ続けていた。
城に仕える中級魔術師だつた。

外には、今まで二人に圧力を掛けってきた上級魔術師。
魔術師は一人をこの小屋まで追い詰め、命を奪つた。
先に妻を護ろうとした夫が死に、次に娘を護ろうとした妻が殺された。

「終わりだな」

笑い、魔術師は呪文を唱える。

だがその呪文は、途中で断ち切られた。
その胸を、鋭い角が貫いていた。

「な……」

角の持ち主は、本来伝説上でしか登場しない生物。
一角獣だつた。

額に長い一本の角を持ち、馬のような体をしたそれは、魔術師から角を引き抜くと、少女の元へ向かつた。

少女は、いつのまにか小屋の入り口に立つてゐる。

「それは……貴様の守護獣か？」

魔術師は信じられないという風に言つた。

守護獣。

生まれた時から一人に一匹だけ憑いていて、目に見えない形で主人をサポートする。

その守護獣を魔術で具現化すると、獣の姿になる。

故に、守護獣と呼ばれている。

具現化された守護獣は、主人に付き従う。

魔術や剣術への耐性もあり、ほぼ無敵といってよかつた。

しかし、彼のような上級魔術師でも、そう簡単には扱えない術であつた。

使用すると、激しく体力を消耗する。

鍛錬していない者は術を成功させること無く十中八九氣絶し、運が悪ければ命まで落とすこともある。

よく鍛錬した者でも、短時間しか術を維持できない。

しかし、この少女は。

きちんと魔術を習つてもいないこの少女は、おそらく使うのは初めてであろうこの守護獣の魔術を、一発で成功させてしまった。

「何故……」

倒れ、最期に呪文を唱えようとした魔術師を、一角獣は踏み潰した。

容赦無く、頭蓋骨を踏み割る。

ぐしゃり、という音と共に、脳髄が漏れ出した。

「ひつ……」

少女は恐ろしくなつて、小屋のドアにしがみ付いた。気が付いたら口が勝手に動いていた、という事実が、一角獣を呼んだのが自分だという事実が、少女には分からなかつた。

一角獣が少女をじつと見つめる。

少女は怯えて、体を小さくした。

しかし、一角獣の目は優しくて。

次第に、恐怖は薄れていつた。

そして、日が昇る頃。

少女を見つめていた一角獣は、すっと消えた。

まるで、煙が空に消えるように。

それと同時に唐突に疲労が襲い、少女は氣を失つてその場に倒れた。

「君、大丈夫?」

通りかかったのは、城に勤務に向かう途中の上級魔術師だった。惨劇の後、初めて通りかかる人間だった。

倒れたままのどうやら生きているらしい少女を、優しく揺り起こす。

少女は目を覚ますと、起こした相手を眺めた。

ぼうっとした頭で、状況を把握しようと辺りを見回す。

「あつ……！」

記憶が脳裏に蘇り、少女は愕然とした。

魔術師が来た事、両親が殺された事、一角獣が現れた事。そしてそれが夢ではなかつた事に、少女は恐怖した。

「う……ああ」

静かに泣き出す。

通りがかりの魔術師は対応に困り、少女が泣き止むまで待つていた。

「何があつたんだい?」

優しい声に、少女は顔を上げる。

若い男の顔が、視界に入った。

そして両親を殺した魔術師と同じローブに、少女は小さくなる。魔術師は怯える少女の頭を撫でると、同じ高さの皿線まで屈んだ。

「名前は?教えてくれるかな?」

「……フレア・スター・ジユ」

「スター・ジユさんのところの子か。……フレアちゃん、何があつたのか、話してくれないかな?」

フレアは怯えたまま、魔術師の顔を見た。
優しい表情。

「怒らないから」

「……ほんと？」

「本当さ。大丈夫、話して、」
やがて、フレアは涙声で話し出した。

魔術師はフレアを孤児院に連れていった。

フレア本人の希望で、城ではなく、孤児院に。

「本当にいいの？ フレアちゃんみたいな才能ある子なら、城として
も歓迎するけど」

「魔術師は嫌」

トライウマになってしまったのか、フレアは魔術師に近づこうとも
しなくなつた。

魔術師はそんなフレアを悲しそうに見つめる。

「じゃあ、気が向いたらおいでよ」

「……」

返事をせず、フレアは魔術師に背を向けた。

数年後、フレアは考えていた。
このまま孤児としてそれなりに生きていいくべきか、親の跡を継い
で魔術師になるべきか。
結論は、思つたより早く出た。

親のような、善い魔術師になろう。

それが、フレアの決意。

フレアは城に出向き、事情を説明した。

数年前フレアに声をかけた魔術師は快く迎え入れ、フレアの魔術
学校への入学が決まった。

将来城に仕えることを条件に、授業料全額免除で。

親のいないフレアは学校で噂されていたが、同時にフレアの実力も伝わっていた。

それに、フレアからは常にかなりの量の魔力が漂っていたので、迂闊に手を出す者はいなかつた。

卒業したフレアは、契約通り、城に仕え始めた。
しかし、それは決して楽しいものではなかつた。
城にも、フレアを蔑みの目で見る者がいた。
それも一人や二人ではなく、大勢。

孤児のくせに、と陰口を言われた。

そして、フレアを危害を加えようとする者も少なくなかつた。
フレアはその度に撃退していくが、精神はそう強くはなかつた。
誰にも、褒めてももらえない。

上司は皆敵のようで、あからさまにフレアを嫌悪した。
フレアを迎えた魔術師は別の所属に飛ばされ、もう会つようと
も無くなつた。

フレアは、独りだつた。

そんな時、

「王子の…教育係ですか？」

フレアは信じられず、それを告げた王に訊き返した。

「そう、そなたは国一番の魔術師だ。そなたなら、生まれてくる王子を安心して預けられる」

フレアは、自分の顔から血の氣が引いていくのを感じた。
それと同時に、喜びが生まれるのも。

新月の夜に朝が訪れたあの時のように、フレアは安堵した。
やつと自分の居場所が出来た、と。

15・灰色の空

「何よ、あんたも私を嫌うの？そりよね、私は悪だもの半ば自棄になつて、カーラは叫ぶより口宣ひ。

フレアは答えない。

ただ俯いて、床の木目を見つめている。

(どう答えたら良いのかしら)

フレアは本気で悩んでいた。

認められない悔しや。

後ろ指を差される悲しさ。

居場所の無い寂しさ。

分かつてしまふから、余計辛い。

寂しさを紛らわすための少女の行為が、フレアには否定できなかつた。

「それでも……」

フレアは同情を押し殺し、言い放つた。

「貴方のしていることは、人としてやってはいけないことです」

「分かつてる、そんなの」

カーラは目を細め、ナイフを構え直した。

フレアは溜息を吐き、指先をカーラに向ける。

「もう殺人はしないと誓うなら、許すわ」

フレアの言葉は、カーラの目に憎悪を宿らせるだけだった。

ナイフを翳^{かざ}し向かつてくるカーラに、フレアは呪文を唱え軽く指

を振つた。

部屋が一瞬、真昼のように明るくなつた。

炎の赤色が、周囲を照らし出す。

そして、炎は消えた。

跡には、銀色の灰がちらほらと。

さつきまで其処に存在していた、少女の姿は消えていた。

まるで、初めから無かつたかのようだ。

「居場所つていうのは、周囲に認められる」とじやない」

フレアは一人、呟いた。

「自分が存在したいと思つた空間が、居場所なのよ。でも、その為に誰かを傷つけるのは間違つてるわ」

「怪我、治してくれたのスター・ジユさんですよね？ありがとハビィザイムス」

田を見ましたエスラルが言った。

傷は完全に塞がり、跡形も無い。

「エスラル君だつて敵を倒してくれたでしょ？お互い様よ」

そう答えたフレアの顔は、少しやつれている。

「……何かあつたんですか？事件は解決したじゃないですか？」

「少し、昔の事を思い出してしまつてね……」

暗い声で言い、フレアは空を見上げた。

灰色の雲が空を蔽つているものの、日の光はその隙間から溢れている。

「結局あの事件、アサシンとは関係ありませんでしたね」

エスラルの言葉にも、フレアは上の空だった。

（まあ、フレアさんのことだから、時間が経てば元に戻るだろ？なあ）

しばらく話は止めておこひ、とエスラルは沈黙する。

そして一人は、黙々と歩き出した。

ぼうつと意識の霞んだ頭で、眼下を見下ろしていた。

何処かで感じたのか分からぬ、思い出せないものを、体が感じている。

記憶の何処かに、同じ感じが残っていた。

緑豊かな森が広がり、その中央に、小さな村がある。頭上では青白い月が、世界を照らしている。

澄み切った空で、星達が瞬いている。

風は無く、鈴の音のような虫の声が幾千も響いていた。すう、と息を吸う。

理性は冷静に頭の中に呪文を紡ぎ出していたが、感情は烈火の如く怒りに満ち溢れていた。

叫びたくなる衝動を必死に抑え、村を見つめた。

もう夜も遅く、人影は見当たらない。

決心して、口を開いた。

口からすらすらと、単調に呪文が流れる。

呴くように、けれどはつきりと。

ポツと、火が灯った。

風に揺れる蠟燭のような、小さな炎。

しかしそれは瞬く間にあちこちに点き、規模を増した。

火は燃え広がり、村を混乱に陥れる。

やがて小屋から人が飛び出してくるのを、じつと見つめていた。

下方から飛ぶ火の粉が宙を舞う。

逃げ惑う人々を、無感情に見つめていた。

嬉しくも、悲しくも、ない。

ただ、先ほどまでの怒りが、すっと収まつていった。

自分は何をしようとしているのだろうと、首を傾げるほどに。

それでも、燃える村を、森を見ていると、心が落ち着いた。

これで良かつたのだと、信じられた。

燃え盛る小屋や木々から離れようと必死になるが、次々と燃え移る火はだんだんとその速度を上げ、仕舞いには、逃げ道は一つも無くなつた。

火の手はそれでも容赦無く、襲い掛かつた。

悲鳴が飛び交い、燃えたままの木や家が人々の上に崩れ落ちる。森の木々は、火達磨ひだるまと化し、既に原型を留めてはいない。

「助けて！」

耳に、悲鳴が飛び込んできた。

小さな、少年の声。

「姉さん！」

倒れて動かない少女を、少年は揺すつていた。

もう少女は目を開けることは無いと分かっていながらも、泣きながら叫んでいる。

そう分かるほどに、少女は悲惨な状態になつていた。
上半身は顔を含めて焼け爛ただれ、片足は失われている。

「姉さん、姉さん、姉さん！」

少年の声が、聞こえてくる。

何故だか、耳を塞ぎたくなつた。

弟が姉を呼ぶ悲痛な声を、耳に入れたくなくて。

「止めろっ！」

耳に手を当てたまま叫ぶ。

その声に反応するかのように、炎は一瞬の間に一人を包んだ。

姉を抱えたまま、少年は燃えた。

じゅう、と音を立てながら、一人の子供は燃えていく。

それさえからも目を逸らし、上を見上げた。

綺麗だと思つた月は、不気味に見えた。

と、憎しみが込み上げてきた。

この世界の全てへの憎悪が。

自分でも自分が分からなくなつた。

はつとして、目を開けた。

目の前には、フレアの顔がある。

「大丈夫？」

心配そうな目が、エスラルを見つめていた。

「あ……無事つてことは、解決したんですね……事件……」

「ええ」

短く答えるフレアの顔は、暗かつた。

「……魔されていたけれど、夢でも見ていたの？」

「ああ……」

夢の内容を思い出して、エスラルは苦笑した。

「ただの夢です」

「えーっと、スター・ジユさん、当てとかありますか」
エスラルは地図を見ながら言った。

といつても世界地図なので、町の名前はぽつりぽつりとしか載つ
ていない。

「うーん……あ、噂なら……」

城でずっと王子といったのに何処から噂が流れてきたんだ、といつ
突っ込みを呑み込んで、エスラルはフレアを見た。

「何処ですか？」

考えながら、フレアは指を動かす。

「此処よ」

指したのは、そう遠くない村だつた。

「何の変哲も無い村に見えるらしいんだけどね」

フレアはトントンと指で地図を叩く。

「訪れた旅人が、消えてるらしいのよ
妙ですね……何かあるんでしょうか」

「行つてみましよう?」

「はい、でも旅人が狙いなら、気をつけなければいけませんね」

田舎の、農村。

あちこちに藁で造られた小屋が並び、田畠が視界の大部分を埋め
ている。

「和むわね……」

フレアは小さく深呼吸した。

田舎の空氣は美味しい、といつ噂は本当らしい。

吹き渡る風が、心地良い。

しかし、今は田舎に静養に来ているのではない。

「怪しい人を見つけたら、見つけないと。危険です」

そう、復讐の旅の最中なのだ。

しかし大自然に囲まれていると、復讐のことなど吹き飛んでしま

いそうだった。

(……駄目)

フレアは、ぶんぶんと首を振った。

復讐に必要なのは、強い精神力。

(王子を殺されたこと、忘れられる筈がない)

途端に、どうしようもない虚無感がフレアの中で広がった。

王子に、もう会えない。

その事実を再確認してしまって、フレアは俯く。

そして当の王子は、和やかな自然の香りにうつとりとしていた。
俯くフレアに気がついて、不思議そうな顔をする。

「どうかしたんですか？」

「ちょっと……王子のこと思い出して」

「ああ……」

エスラルは納得し、また景色を眺める。

「早く、奴等を見つけないとけませんね」

慰めることはできない。

エスラルは、死の悲しみを知らないのだから。
気持ちを知らない者の慰めは、効果が無い。

(……いつか、僕にも分かつてしまう時が来るのかな)

ふと考えて、エスラルは未来に思いを馳せる。

(来ないといいな)

空を見上げ、そんな当然の願望を、抱いた。

「旅人とは珍しい。最近めつきり減つてしまつてなあ」

村を案内する男は、二人を見て喜んだ。

噂が流れ出してから、此処には人が来ないと言つ。

エスラルはうんうんと頷いた。

「その噂、本当なんですか？」

「それがなあ、本当だから困つたもんだ」

男は溜息を吐いた。

若くもなく、かといつてそれほど老いているわけでもない。

中年の男だつた。

「夜の間に、いつのまにか消えているんだ。この辺の人々は神隠しだと言つてゐる。村に余所者を入れるな、と地神様が怒つてるんだ」とさ」

言い方からして、男は神隠しを信じていらないらしい。

「対策とか、されていないんですか？」

エスラルが訊くと、男は困つたように肩を竦めた。

「それが、夜の間見張りについた者が殺されているんだ。一人残らずなあ。だから今じや、わざわざ見張ろうなどと言つ者はいなくなつた。旅人も来なくなつたしな」

エスラルはフレアと顔を見合させた。

「可能性あり、でしようか」

「そうみたいね」

「何の話だ？」

男が不思議そは不思議そに首を傾げたが、

「いえ、こつちの話です」

とエスラルが言つと、それ以上食い下がることはしなかつた。

「あー……城のベッドが恋しい」

違う場所で、エスラルとフレアは同じことを言った。

一応男と女ということでの、二人は小屋を分けられたのだった。見張りについて殺された大半は独り身だったので、村には空き小屋が幾つもできてしまったらしい。

だがその生活は粗末なものだつたらしく、小屋の中にはベッドはあるが一つも家具は見当たらず、床に布のようなものが転がっているだけだった。

壁には鍬が立てかけてあり、既に鋸びている。

「此處で寝るのかな……」

小屋を見渡しながら、エスラルは呟く。

ボロ小屋の、天井の隅の蜘蛛の巣や穴の開いた床が田に留まる。さらには、天井裏を鼠が駆ける音まで響いてきた。

エスラルは一瞬だけ眞面目に、城の自分の部屋へ帰りたいと思つた。

ふかふかのベッドが、頭を過ぎる。

「何これベッド……？」

フレアは布を見つめ、眉を顰める。

布はボロボロで、埃に塗れている。

床に開いた穴からは、百足が這い出していた。

フレアは、魔術で城へ帰ろうかと本気で思い悩んだ。

一人はこうこうところだけ妙に綺麗好きらしい。
(この村からは早く出よう……)

同じことを、二人は考えていた。

色々と思つといひはあつたものの、一人は眠りについていた。勿論ボロ布は使わず、マントに身を包んで柱にもたれてい。

「つー？」

気配を感じて目を覚ましたエスラルは、体が動かないことに気がついた。

小屋の外では、満月がぼんやりと光を放つていて、雲は無く、快晴の夜だった。

「旅人さん」

小屋の入り口で、声がした。

案内人の、男の声。

エスラルは体を動かそうとするのを諦め、男を睨んだ。

「この村は昔から、飢饉が少なかつた。他と比べて、劇的にな何を言つているのかと訝しむエスラルをよそに、男は語る。

「日照りが続くことも無ければ、長雨も無かつた。何故だか分かるか？」

床を音も無く歩きながら、男はエスラルに近づく。

「俺が、生贊を捧げているからだ」

そのどんでもない言葉に、エスラルは耳を疑つた。

「生贊といつても、神様にではないが、まあある人物にだ」

(……嫌な予感がする)

「だがその方に人間を差し出すと、いつも豊作になるんだ。しかも犠牲になる者が多いほど、その効果は増す。嘘じやない」

男は一人喋っている。

「代わりに、捧げなかつた時は嵐がやってきて、村は半壊した」

男はエスラルを背負い、立ち上がつた。

エスラルはなされるがままに男の背中に乗せられる。

「そして今日が、またの方の訪れる日なんだ」

エスラルは口さえも動かせず、ただ黙然と地面を睨んでいた。

「はあ……疲れたな」

すいぶん苦労したらしい男が、フレアを担いでやってきた。その額には、薄つすらと汗が浮かんでいる。

村の外れの、林の奥。

真夜中の林は、しんと静まり返っていた。

鈴虫の音だけが、こだまする。

フレアを地面にそつと寝かすと、男はエスラルを見た。

「何か言い残したいことは？」

静かな声で、そう言った。

「だけ自由になつたことに気づき、エスラルは口を開く。

「どうやつてスター・ジユさんを？」

「普通にノックして入つたら出迎えてくれた」

(は?)

半ばフレアに呆れ、エスラルは溜息を吐く。

(フレアさん……色んな意味で無防備すぎだよ……)

そして、フレアが気を失つていることに気づく。

「とにかく、スター・ジユさんを起こしてください」

無理を承知で、言つ。

「却下」

予想通り、無理だつた。

「そいつはかなりの魔力を放つてゐるからな」

魔力とは、人間が魔術を使う際に消費する力だ。

意識していないと、膨大な魔力は体から漏れ出てしまう。

エスラルは、唇を噛んだ。

「眠らせたまま、殺そうって言つんですか」

エスラルは男を睨んだまま言った。

即座に男は頷き、口を開く。

「邪魔させる訳にはいかない」

「だったら……」

エスラルは微かに笑つた。

「僕が邪魔しようかな」

直後、エスラルの口から呪文が漏れた。

一陣の風が、林の中を駆け抜ける。

それと同時に、変化が解けた。

銀髪の少年が、現れる。

深緑のマントに、王家の印が浮かび上がる。

風に揺られ、印は月光に照らされ光った。

封じていた魔力が体に舞い戻った。

湧き上がる魔力が、辺りに空気の渦を作る。

「な……？」

男をよそに、自分に掛けられていた束縛魔術を解く長い呪文を、
ものの数秒で言い終える。

「何を……？」

男は早口で呪文を唱えだした。

クラウスはそれより早く呪文を呴き、男の魔術を振り払うように、
手を横に振る。

同時に、クラウスに向かつて噴き出された炎が、呆氣無く消えた。

「何だお前は……？」

男は驚愕した様子で呴いた。

クラウスから並々珍らしか自分をも超える魔力を感じ取ったせい
だろう。

「……ふう」

クラウスは溜息を吐いた。

渦巻いている魔力を抑え、男を見る。

「……これ、抑えるの結構疲れるんだよ？まあフレアさんの前じゃ魔術使う必要無かつたから封印魔術かけてたんだけどね」困ったように言って、クラウスは再び溜息を吐いた。

月の光が、クラウスの揺れる銀髪を照らす。

「君」

クラウスは幼い声で、男に呼びかけた。

そして気づいた頃には、男は首筋に剣を押し当てられていた。

「……何故、斬らないんだ？」

男は怪訝そうに尋ねた。

「ちょっと訊きたいことがあってね」

子供らしい無邪気な笑みを浮かべながら、クラウスは言った。

「アサシンって組織、知らない？」

「知っている」

男は即答した。

クラウスは目を見開く。

「ほんと？」

「ああ。旅人を差し出している相手だ」

「！？」

「豊作の話は本当だ。の方達に人間を差し出しているから、この村は安泰なんだ」

(……魔術じやなさそうだな…何か特別な能力かな?)

クラウスは、呪文を唱え始めた。

見る間に、黒髪の大人びた少年に様変わりする。

魔力が、吸い込まれるように消えていく。

(そもそもフレアさんが起きるといけないしなあ)

驚く男を見ながら、そんなことを思った。

「……でも」

「エスラルは茶色に変わった瞳で、男を見つめた。
「君のやつてることは、絶対間違つてる」

男は俯いて、言葉を吐く。

「そんな台詞は聞き飽きた」

軽蔑を込めて、男はエスラルを睨む。

「仕方なかつたんだ」

噛み締めるように、強く言つ。

「脅されたんだ。毎月生贊を出さないと、村を破壊するつて！村を
守るには、やつてきた旅人を奴らに渡すしかなかつたんだ！他にどうしろって言つんだ！」

「……なるほど」

エスラルは真剣な面持ちで頷いた。

それがどれほどの恐怖だつたか、エスラルには分からぬ。

けれど、エスラルは言つた。

「でも、それはやつぱり間違つてゐる」

淡々と言つ。

「何の関係も無い人達を巻き込んで守る……そんなの、ただの
自己満足です。自分達の問題でしよう？」

「お前には分からぬ」

「分かりませんよ。そんなの。分かりたくもない」

「……」

男は長い溜息を吐き。

次の瞬間、顔を強張らせた。

田を見開き、すぐに閉じる。

男は、ゆっくりと崩れ落ちた。

エスラルの田の前で、苦しげに顔を歪ませて。

けれどその表情には、僅かに安堵が表れていた。

どさり、とうつ伏せに林の中に転がる。

倒れた男の首には、鋭利なナイフが突き刺さっていた。

「！」

驚くエスラルの前で、紅い血が池を作り始めた。

エスラルは目を細めた。

（人に…刺さつ……？）

見たことがあった。

人間の軟らかい肉に、鋭い刃物が突き刺さっている様子を。
どぐどくと流れ出す血が、体を伝つて地面を染めていく光景を。
そこに恐怖は無く、ただ愛情と悦びだけが漂つていた。
エスラルはふと安らかな表情になつたが、次の瞬間木立を睨んだ。
がさがさと音を立てて、青年が現れる。

「お、失礼」

黒髪の青年は、倒れた男に近寄り、首からナイフを抜いた。
刺さつていたものを一気に引き抜かれ、男はがくんと揺れる。
そして再び、その頭を地面へ打ち付けた。

青年は布を取り出し、ナイフの刃を拭き始める。
血塗れのナイフが、光沢を取り戻した。

「あ……」

突然のことに呆然と、エスラルは呟く。
念入りにナイフを拭く青年を、じっと見つめる。

「ん？」

青年もまた、エスラルを見つめた。

そして、エスラルに向かつて自己紹介した。

「あ、どーも。俺、『アサシン』のレシェード・フラジュットす
体を硬直させたエスラルに、レシェードはふつと笑つた。
それはとても、軽快な笑みだつた。

灰装束の青年レシードはにやりと笑つた。
獲物を見つけた肉食獣のようで、けれど爽やかさを忘れない、そんな笑み。

(バレたかな……)

エスラルは警戒してレシードを見つめる。

「見かけない顔だな……旅人なのか？」

どうやらエスラルの正体には気づいていないようだ。

レシードがようやくナイフを拭き終わり、再び構えた。

「……拭いた意味無いじゃないですか」

「気にすんな」

藍色の目が笑う。

エスラルはレシードを睨んだ。

その目には、困惑と嫌悪が浮かんでいる。

「何故この人を殺したんですか？」

血の池の水源となつていい男を指差して訊く。

レシードはきょとんとした。

何故そんなことを問われなければならぬのか、と怪訝な表情を見せる。

けれどすぐに、おどけたように体を揺らした。

「何故って、喋られると困るからや。まあ半分くらいは俺の気晴らしだけどな」

ナイフを、エスラルに向ける。

「お前がいるのにも気づかなかつたよ」

嘘には聞こえない。

そもそも、エスラルに気づいていたのならわざわざ立つようこ^{ヒリ}殺す必要は無い。

あとで2人とも速やかに始末すれば良いのだから。

(……馬鹿？)

エスラルは半ば呆れて、剣を構える。

「さあて、次はお前殺さなきやな」

ナイフがエスラルの首目掛けて飛ぶ。

だがすぐに、剣に弾かれた。

レショードはどこから出したのか、両手に5本ほどナイフを用意している。

そしてそれを、4本同時に投げた。

キン、という音が4回響き、ナイフが次々と地面に落ちる。

レショードは間髪入れず、最後に残ったナイフでエスラルに切りかかった。

「つと！」

それさえも、エスラルは軽々と受け止めた。

レショードはまたも愉快そうに笑う。

「久しぶりだな、ここまで無傷なヤツ。楽しませてくれよ？俺は退屈してるんだ」

ははは、と笑いながら、レショードはエスラルから距離を置く。

(偉そうな奴……)

エスラルは顔を顰め、剣を構え直した。

レショードが笑顔のまま、呪文を唱える。

エスラルの体が吹っ飛び、そのまま木に激突した。

大木が大きく揺れ、軋む。

「もしかして、魔術は全然なのか、お前？」

残念そうに、けれど嬉しそうにレショードが言つ。

(変化、かけるべきじやなかつたかな)

少し後悔しながら、エスラルは再びレショードを睨んだ。

23・得たものは無し

横向きの状態で木に激突したエスラルは、衝撃で地面に崩れ落ちた。

左腕を強打し、ずきずきと鈍痛を伝えている。
しかし、骨は折れていないようだ。

「……」

エスラルは無言で、立ち上がった。

「お？まだやるの？いいねえ」

レシェードが楽しげに笑う。

完全に、この勝負を楽しんでいるようだ。

エスラルは痛む左腕を無視して、切りかかった。

レシェードがそれをナイフで受け止め、振り払う。
間髪入れず、レシェードはいつのまにかもう片方の手に持つていたナイフで、エスラルに切りつけた。

エスラルは軽く躊躇し、剣を振りかぶる。

その脇腹を狙い、レシェードがナイフを振るう。
と、エスラルはその状態からナイフごとレシェードを蹴りつけた。
レシェードは避けきれず、とともに飛ばされる。
そこに、エスラルは剣を構え突進した。

「ちつ

「ちつ

どこか嬉しそうに舌打ちし、レシェードが早口で呪文を唱える。
エスラルの目の前に、大木が倒れかかった。
咄嗟に後ろに飛び退き、エスラルは大樹で塞がれた視界をじっと見つめる。

一時的に、林はしんと静まり返った。

エスラルは一心に、向こう側からレシェードが来るのを待つ。
神経を集中し、気配を探す。

そして背後に振り向き、後ろから来たレシェードの斬撃を受け止

めた。

「へえ……やるじゃん！」

そう言つて笑みを浮かべるレシェードの額には、少量の汗。相手の方は剣術と魔術の併用で、疲弊しているようだつた。（あれくらいでそんなに消耗するかな……？）

エスラルは疑問を抱きつつ、レシェードを振り払つ。と、唐突に目を見開いた。

レシェードがにやりと笑う。

「やつと気づいたか？」

パチパチと何かの焼ける音が、林に響いていた。

鈴虫の鳴き声は、いつのまにか止んでいる。

火の手が、じわじわと迫つていた。

それに気づき、エスラルは顔を顰める。

「面倒なことをしてくれましたね。ずいぶんと力を使つたでしょうに」

「はは、いい考え方だろ？」

「……」

次の瞬間、エスラルは目にも留まらぬ速さで動いた。

「がつ！」

レシェードが声を漏らす。

その胸には、エスラルの剣が深々と突き刺さつていた。

「本当は色々と聞き出したかったんですが……仕方ありませんね」

消火の方が先決である。

二人が戦っている間にも炎は増大し続けていたらしく、周りは火に囲まれつづあつた。

エスラルが剣を引き抜き、レシェードはどうと倒れる。

もう動くことは無く、ただ虚ろな瞳が炎を映していた。

（さあ…どうしようか）

その時、不意に炎が消えた。

一瞬にして、林を赤で照らしていた炎がまるで電気のスイッチを

切るように消え去った。

「だ、大丈夫だった？」

声がした。

聞き慣れた、フレアの声。

どうやら、魔術で火を消したらしい。

黒い炭と化した茂みから現れたフレアはレシェードの死体を見て眉を顰めたが、すぐにその装束に気づき目を見開いた。

「すみません……殺すべきではなかつたのに」

「いいの。仕方なかつたんでしょう?」

エスラルは頷き、フレアを見上げる。

「……行きましょつか

「……そうですね」

23・得たものは無し（後書き）

此処を放置して早2ヶ月……。

転居等の事情でもうべくお知らせせねば執筆を放置したことをお詫び致します。

放置中にもかかわらず毎口足を運んでくださった方々への深い感謝の気持ちでいっぱいです。

アクセス数があまりにも少なければ閉鎖しようとも考えていたので、励みになりました。

本当にありがとうございます。

少々落ち着いたので、また執筆を続けていこうと思います。

しかし作者はまだ学生で2月は試験や行事などが多数重なりますので、更新は遅れがちになるかもしません。

精一杯努力しますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

一人は早くも出発し、森の中を歩いていた。人気は無く、ひつそりと静まり返っている。

「ごめんなさいね、油断してしまって……」

事情を聞いたフレアが、申し訳無さそうに謝る。

エスラルは苦笑して、首を振った。

「いえ、俺もですか？」

油断しそぎていた。

そのせいで、敵の情報を掴むことができなかつた。

（もつと…うまくやれたはずだ）

エスラルは唇を噛む。

予想外の出来事だつたからといって上手く対処できなかつた自分に腹が立つた。

「……大丈夫？」

気がつくと、フレアが心配そうにエスラルを見つめている。

「怪我、まだ治つていらないのかしら？」

「あ、いえ、大丈夫です」

レシュードに飛ばされた時に作つた傷はフレアが既に治していて、文句のつけようが無いほどに完璧だつた。

どうやら責任を感じているらしく、念入りに呪文を唱えていた。

「スター・ジユさんは……」

「うん？」

エスラルは口ごもり、思考する。

しかしやはり言おうと決意し、再び口を開いた。

「スター・ジユさんは人を殺したこと、ありますか？」

「！……」

突然の質問に、フレアは驚いた顔をした。

意表を衝かれたらしく、立ち止まる。

「どうしてそんなことを……？」

「俺、今まで人を殺したこと無かつたんですね」

エスラルは答え、同じく立ち止まる。

「でも俺、初めて人を殺しても特に何も感じませんでした。寧ろ快感だった」

その声は震えている。

自身に恐怖しているようだった。

「普通の人は後悔したり怖がったりするんでしよう……のになんでおかしいんでしょうか、俺は。それに……」

それに

あのアサシンと繋がりのあつた男が死んだ時、妙に安らかな気分になつた。

噴き出す血を見ていると、ビックで同じような光景を見た気がしたのだ。

とても懐かしく愛しい記憶は、けれどエスラルの中には見つかなかつた。

「……やつぱり、良いです。自分で考えます」

エスラルは首を振つて言つた。

そして、再び歩き出す。

フレアに尋ねても、分かることはないだろ？

自分で考えなければならぬ問題だ、とエスラルは感じていた。と、その時。

「！」

エスラルが一瞬びくりとして、歩みを止めた。

「どうし……！」

フレアも尋ねかけ、動きを止める。

「何か来る……？」

気配が、迫っていた。

25・正体不明

「これは…………」

エスラルは緊張を覚えながら、剣の柄に手をかける。

気配は一つ。

大きな力を纏っているようだ。

それは確実に、一人の方へ迫ってきていた。

「誰なの…………？」

フレアは不安そうに辺りを見回す。

と、不意に茂みから影が飛び出した。

常人では視認できないほどのスピードで、真っ直ぐフレアに向かう。

「スター・ジユさん！！」

エスラルが声を上げた時には既に遅く、フレアはどさりと地面に崩れ落ちた。

駆け寄ろうとするエスラルの前に、先程の影が立ち塞がる。

「ちょっとキミ！」

街中で道を尋ねる時のような調子で声をかけられ、エスラルは思わず相手を見上げる。

フレアよりさらに高い背の持ち主は、精悍な顔つきをした青年だった。

「ちょっとといいかな」

「そこ、退いてくれますか？」

エスラルは青年を睨みながら剣を抜く。

青年が苦笑しながら答える。

「まあ落ち着けって。オレはキミに用があるんだからや」

エスラルは無言で切りかかる。

しかし、それはいつも簡単に受け止められた。

エスラルが振りかぶった時、まだ剣を抜いてもいなかつたのにだ。

そんな素早い動きを見せた当の青年は、困ったようにエスラルを見つめている。

「……」

エスラルは予想通りといった様子で剣先を下げた。

目の前の青年はからは、大きな力が感じられたのだ。

今の自分では太刀打ちできそうにもない、威圧感。

「スター・ジューさんは……」

「大丈夫、気絶しているだけだよ」

させたのはそっちだらう、といづ言葉を呑み込んで、エスラルは青年を見上げた尋ねた。

「用つて何ですか？」

青年は苦笑を笑顔に変える。

「キミの力についてわ」

「……」

(どうして……クラウスの時を見られてた?)

そんなエスラルの心中を察したよつて、青年はここと笑つて続ける。

「いや、オレ達の仲間の一人が、制御されても力を感じることができるんだよ」

そんな能力は、お伽話の中でしか聞いたことがなかつた。

「信じられませんね」

「そんなこと言われてもなあ……それで、一緒に来てもらえるかい?」

「……」

エスラルは怪訝そうに青年を眺めた。

「貴方は何者なんですか?」

眺めながら考える。

今クラウスに戻れば、この青年を倒せるかも知れない。フレアを放つて、青年について行くわけにはいかない。しかし、その考えはすぐに打ち消された。

「オレかい？ オレは……」

「圧が、跳ね上がった。

エスラルは思わず一步後ずさる。

クラウスでも勝てる気がしなくなつた。

「ケーフ・カルロつていうんだ。一緒に来てくれるよな？」

どこかずれた答えを、青年は返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6411c/>

記憶の印

2010年10月28日17時32分発行